

賑わう街

明治時代（1868～1912 年）後半以降、釧路は、漁業・木材・石炭・海運の中心地でした。経済が活発になるにつれて人口が増え、釧路は 1922 年に市となりました。新聞が創刊され、植民者の流入に対応するために店が増えました。

釧路の冬の気温は、氷点下にとどまることがよくあります。明治時代には、着物の上に着る「角巻」という羊毛の大きな肩掛けが、女性の間で人気になりました。男性は、「二重回し」という、マントと毛皮の襟がついた袖なしの羊毛製コートを着ていました。この「二重回し」は、スコットランドのインバネスコートに基づいており、和服の上にも洋服の上にも簡単に着ることができました。

釧路は、佐々木米太郎（1868～1951 年）のような事業家を惹きつけました。彼は、釧路の北の小さな町から移り住み、1901 年に米やその他の生活必需品を売る店を開きました。彼は釧路の有力者となりました。市議会議長に就任し、釧路地方の歴史を初めて執筆しました。彼の店の看板には、店名が金箔を使って記しており、現在はこの博物館に展示されています。